

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

日本臨床外科学会国内外科研修体験記
—倉敷中央病院心臓血管外科に寄せて—

伊勢崎市民病院心臓血管外科

三木 隆生

この度、2022年度日本臨床外科学会国内外科研修制度に応募する機会を頂き、願い叶い、岡山県倉敷市の倉敷中央病院心臓血管外科にて同年10月17日から11月11日までの4週間にわたり研修させて頂きました。この制度については、毎年医局の案内メールを頂き認識はしており、私のような複数施設での心臓血管外科修練経験がない若手外科医にとって非常に有難いシステムと感じておりました。新型コロナウイルス感染蔓延がある程度落ち着き始めた今年こそは、と今年度応募させて頂きました。

倉敷中央病院は岡山県倉敷市に位置し、倉敷駅および繁華街に程近い立地で徒歩10分程度です。総病床数1,172床、医師数559名、看護師数1,365名（2022年4月1日現在）と大学病院以上の規模を誇り、手術室数は29部屋と全国でもトップクラスに多く、高度先進医療を実践しつつも、倉敷の地域医療も担う三次救急病院です。研修初日は、あまりに巨大な敷地面積と広大な館内に圧倒され驚嘆しました。同院心臓血管外科は、関西のみならず全国的にも有名なhigh volume centerであり、副院長兼主任部長の小宮達彦先生の手術手技もさることながら、その御指導のもと、これまでに多くのtop surgeonを輩出しておられることは存じていたため、不安と緊張を胸に10月17日研修初日にカンファレンスルームに案内して頂いたのを昨日のことにように思い出します。有難いことに、チームの先生方はとても温かく接して下さり、安心して研修することができました。

倉敷中央病院心臓血管外科での研修で最も感銘を受けたのが、毎朝8時から始まるカンファレンス、特に術前プレゼンテーションと手術計画についてのdiscussionの質の高さです。詳細に患者背景を捉え、画像所見から手術計画を自ら立案し、文献を読み込んでその妥当性を上級医師にも臆せず堂々と提起する様子に圧倒され、自らの平素の不勉強さを痛感しました。とりわけ弁膜症症例の術前には経食道心エコーのみならず4D CTを画像解析して弁尖の所見、接合面の様子、交連部間距離等を測定しており、こういった緻密な術前評価が確かな手術手技の根拠となっているのだと実感しました。術後のICU・病棟管理は、ほぼ完全なチーム制を採用しており、teamsという院内職員専用のアプリケーションツールを利用して、チームの誰もが携帯端末から全患者の状態と治療状況および今後の方針をいつでも迅速に確認し意見交換し合う体制は珍しく、とても興味深く思いました。同時に、このツールを介して、自分が入れなかった症例も含めて全ての手術手技報告や術後ICU管理状況が、担当医師が作成したパワーポイントによるプレゼンテーションの形で確認が可能のため、自己研鑽の強力なサポートにもなると感じました。実際に、私も4週間の研修中teamsに加えて頂き、心房性機能性僧帽弁閉鎖不全症に対する形成術や大動脈弁輪拡大術、小開胸手術の詳細な手技内容をアプリ内の資料で大いに勉強させて頂けて、本当に貴重な経験となりました。総会・地方会・研究会等の学会活動も非常に精力的であり、その発表内容もteamsで共有されており、アプリ内での活発なdiscussionに私も参加させて頂けて、非常に刺激的でした。

手術手技的な観点では、遠位弓部瘤に対する上行弓部置換術における本家本元のturn up法による遠位吻合を、実際に術野で見て学ばせて頂いたのは貴重でした。あえてstay sutureの整理に糸かけホルダーを使用せず、これらの糸を状況に応じて適度なtensionで細かく配置し直すことで、狭く深い術野での

遠位吻合の運針を円滑にするという工夫には驚きました。また、総じて開胸から人工心肺開始、心停止までの流れが迅速で、これを自分より若い先生方が涼しい顔で素早くこなしていることに脱帽しました。さらに、こちらの科では全ての開心術において、開胸や人工心肺導入、およびgraft採取等に要した時間の測定・記録を伝統的に実践しておられました。自らの手技の反省とfeedbackは、姿勢として理想ではあるものの、現実的に実際に実践している科は少ないと思われ、ここにも小宮先生の築き上げた、妥協を許さない日々の自己研鑽の姿勢とその伝統を感じ、自分ももっと勉強しなければならないと改めて強く思いました。

激務でありながら、チーム制ゆえにメリハリのある仕事環境という印象で、私自身も研修滞在中の週末は倉敷市内の美観地区を散策、レンタカーで四国は香川県まで遠征して瀬戸内海・瀬戸大橋に圧倒され、夕方には有名な水島コンビナートの夜景を楽しませて頂きました。美観地区周辺の時代を感じさせる街並み、駅周辺の都会的な雰囲気、そして繁華街から少し離れると秋らしい牧歌的な景色と、倉敷市の多彩な「色」にすっかり魅了されました。

最後に、このような貴重な研修機会を与えて下さった、日本臨床外科学会会長の万代恭嗣先生、国内外科研修委員会委員長の高山忠利先生、研修を温かく受け入れて下さった倉敷中央病院心臓血管外科主任部長の小宮達彦先生はじめスタッフの先生方、また研修をサポートして下さった同 秘書の白岩 瞳様、さらに今回の国内外科研修応募にあたりご推挙下さった日本臨床外科学会群馬県支部長/群馬大学総合外科学講座教授の調 憲先生、ならびに同 循環器外科学教授の阿部知伸先生、そして何より4週間もの不在にも関わらず、快く研修に送り出して下さった当科主任診療部長の大木 聡先生はじめ、チームの皆様方に熱く御礼申し上げるとともに、今回の研修で痛感した「惰性を排除し日々精進する姿勢」を今後追求することを誓って、この日本臨床外科学会国内外科研修の報告にかえさせていただきます。